

第257回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（10）

## 第5章 初期三部作を読むー「福本イズム」の誕生(続)

### 2 「プラン問題」の提起ー『経済学批判の方法論ー 『資本論』の方法論的研究ー』（1926年）

刊行順であれば本節では『無産階級の方向転換』を扱うことになるが、『福本和夫初期著作集』では第2巻が『経済学批判の方法論』となっている。『初期著作集』のとおりの原理論である『経済学批判の方法論』、戦略論である『無産階級の方向転換』の順に論じていきたい。

前節と同様に、序文、内容目次を列挙しよう。福本の著作、論文の目次には、それだけで内容が推測できる場合が多い。また、初期三部作の序文は、それぞれが綱領のような力強い文章から成っている。

#### 序文

1. 世界恐慌（第1次世界大戦後の1920年から1921年にかけて戦時経済から平時経済の移行期に発生した大恐慌ー岩田注）以来、日本の資本主義者社会も明白に其の所謂自己批判期に転進した。そして、此の自己批判は、特に「方向転換」現下の過程によって、今や刻々に、深刻化しつつある。
2. 資本主義の自己批判開始と共に、其の所謂経済的意識形態も亦必然に対立形態をとるにいたった。  
経済学（有産者経済学）は其の対立ー経済学批判をつくり出すにいたった。そして、  
「かかる批判が、苟も一階級を代表する限り、それはただ資本主義的生産様式の変革並にこの階級の徹底的廃棄を其の歴史的使命とするところの階級ー（かくて、資本主義社会の自己批判の主体たる階級）ー無産者団を代表しうるだけである。」
3. 我が階級闘争の最近の発展は、だが、他面に於て、所謂中間派経済学（組合主義に立つ小有産者（プチ・ブルジョア）的経済学ー岩田注）を抬頭せしめつつある。
4. かかる形勢のもとに、先ず経済学の方法を論究ー闡明ー展開ーすること、これここに此の小著の所期するところである。（『福本和夫初期著作集 第2巻』復刻自註版、こぶし書房、1971年、49ー50頁）

純經濟過程、国家過程（政治過程）、意識過程、国際過程、世界過程を概観して社会の変革過程を素描した『社会の構成並に変革の過程』を端初として、そのうち純經濟過程に着目したのが『経済学批判の方法論』であった。第1作では約50頁しか言及しなかった純經濟過程を本書では5倍近くの分量で細かく論究したのである。

## 内容目次

### 経済学批判—マルクス主義経済学—の方法

#### 第1章 マルクスの弁証法

##### 第1節 マルクス自身による約説

##### 第2節 マルクスの弁証法方法の特質（其の1）

歴史的＝社会的関係—認識の主体—経済的範疇—社会的決定論—自然史的過程として—強硬なる対象性形態の、過程への転化—世界を変革すること

##### 第3節 マルクスの弁証法方法の特質（其の2）

下向運動＝上向運動—科学的分析と歴史的発展の道行—形態差別—現象形態と本質—全体性—「それ自身の、内的にして不可避なる弁証法」的発展—「自然的制度」の批判—所謂「定義」の批判

#### 第2章 材料と方法との結びつき

#### 第3章 経済学批判の目的並に対象

#### 第4章 端初

#### 第5章 問題の転向—提出

#### 第6章 商品の偶像礼拝的特質の解剖

#### 第7章 社会的総資本の観察

#### 第8章 それ自身の内的にして不可避なる弁証法による転化

#### 第9章 階級闘争の経済的根拠と傾向

#### 第10章 経済学批判の体系と『資本論』の体系

#### 第11章 経済学批判の方法論の史的発展

##### 第1節 経済学並に其の批判の史的発展

1. 序論 2. 重商制度、重農学派、正統派の先駆  
3. 正統派経済学 4. 空想的社会主義経済学と俗学的経済学 5. 経済学批判—科学的社会主義—マルクスの経済学 6. 無政府主義経済学と俗学的経済学 7. マルクス経済学の展開

##### 第2節 経済学並に其の批判の方法論

1. 重商制度の方法 2. 重農学派の方法 3. 正統派の方法 4. 空想的社会主義経済学の方法 5. 俗学的経済学の方法 6. 無政府主義経済学 7. 限界効用学派の方法 8. マルクス的方法の闘争

### 第3節 最近抬頭せる我が中間派経済学の方法

1. 序論 2. 福田博士 3. 河上博士 4. 小泉教授
5. 高田博士

## 第12章 経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず

### 第1節 経済学批判の終局目的と有産者社会の諸過程

### 第2節 マルクス『資本論』の対象並に範囲

### 第3節 問題の発見

### 第4節 経済学批判についてのマルクスの予図の輪廓

### 第5節 ケネーとマルクス

## 第13章 『資本論』の構成並に範囲について河上博士に問う

### 第1節 回答の目的

### 第2節 駁撃の的は外れたれど一私の向うところと博士の向うところ一

### 第3節 博士の所謂経済的意識形態

### 第4節 『資本論』の構成並に範囲

### 第5節 『資本論』は何を研究するか？

### 第6節 経済的意識形態の分裂、闘争の否定

(『福本和夫初期著作集(第2巻)』こぶし書房、1971年、51-54頁)

第12章「経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず」は福本のデビュー論文(1924年12月)であるとともに、『経済学批判の方法論』の中心的論点でもある。ここでは「『資本論』の範囲」に論点を絞って福本の立論を追うことにしたい。

直接的具體から抽象まで下向・分析した後に上向・綜合して媒介的具體へ至る道がマルクスの方法論である。純經濟過程から世界過程までを網羅して論じることがきわめて困難な理論構築となる。

福本は『経済学批判』(1859年、『資本論』の副題は「経済学批判」)に断片的にあらわれるマルクスの「予図」を掘り起こす。初めて経済学の体系的研究を著述した『経済学批判』「序言」(『経済学批判序説』1857年とは異なる)の冒頭で、マルクスは「わたくしはブルジョア経済の体制をつぎの順序で考察する。すなわち、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場。はじめの三項目では、わたくしは近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的諸条件を研究する。あとの三項目の連関は一見してあきらかである。」(前掲岩波文庫、1956年、11頁)と宣言する。

ここでマルクス学にとって重要な問題が提起されてくる。『資本論』全3巻はマルクス経済学の全体系とどういう関係にあるのか

という問題、すなわち「プラン問題」である。この文脈においてのみ福本の議論は意味をもつ。当時の日本の読者たちは「プラン問題」を知らない。福本のデビュー論文が「日本のマルクス主義者がいかに無学であったかを、いやでもおもしろられる新鮮な内容をもっている」（第3章で触れた林房雄の回想）といった驚きと混乱の反応を惹き起こしたのは無理もなかった。

資本（資本一般、競争、信用、株式資本）、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場の6項目のうち『資本論』はどの項目を扱っているのか。

『資本論』の経済学批判中に於ける範囲如何は、マルクスにありては極めて明瞭な問題である。即ち資本の現実的運動の説明は「本書（狭義の経済学批判—『資本論』）の立案の範囲外に属するものであつて、将来本書が継続せらるることあらば（広義の経済学批判）その際なさるべきところのものである。」ただ惜しいかなそれは継続されずに終ったものである。（中略）篇別は明らかに、次の如くなさるべきである。第1に一般的に抽象的諸規定を展開せしむべきである。（中略）

「第2に、有産者社会の内的編制を形成し、且基本的諸階級がそれに依存するところの、諸々の範疇。資本、賃労働、土地所有権、それら相互の関係。都市と田舎。三大社会階級（資本家、地主、賃金労働者—岩田注）。これら階級の交換流通。信用制度（私的）。

「第3に、有産者社会の国家形態への包括。それ自体の關係に於て觀察。不生産的階級。租税、公信用、人口、植民、移住。

「第4。生産の國際的關係。労働の國際分業。國際的交換。輸出輸入、為替相場。

「第5。世界市場と恐慌。」（『経済学批判』緒論）

このうち第2が私の所謂経済的過程の範囲—またマルクス『資本論』の範囲、第3が所謂国家過程、第4が國際過程、第5が所謂世界過程の範囲に該当する。

註 この「第1」は、一旦書き下しはされたが、其の後、方法論的熟慮の結果マルクス自らこれをしまってしまった所のものである（『経済学批判』の序文参照）。 （前掲260—261頁）

福本は第2の範疇（資本、賃労働、土地所有権）が『資本論』の範囲であると推量する。『資本論』の基本的機構は「有産者社会の内的編制」である。下向法の終点である端初としての商品から出発して、資本、賃労働、土地所有の純経済過程へと上向していく「プラ

ン」は経済学批判の一部のみを成し遂げるに過ぎない。マルクスは全体像を「予図」したにとどまり、経済学批判は未完に終わった。

福本にとっては「極めて明瞭な問題」はその後のマルクス学では決して「明瞭」ではなかったようだ。

宇野理論の継承者の一人である渡辺寛によれば、福本の「プラン」解釈はその後の通説とは著しく異なるという。「本邦初演」の福本による「プラン問題」の提起は、戦後に本格的に始まる久留間鯨造（1893－1982、法政大学教授、大原社会問題研究所所長）らの研究では言及されることはなかった（前掲『福本和夫の思想－研究論文集成』96頁）。

「プラン問題」に関しては小澤光利「いわゆる「プラン問題」再考」（法政大学学術機関リポジトリ『経済志林』第77巻第3号、法政大学経済学部学会、2010年、415－425頁）が詳しい。それによると国内外で次の11学説がある。「A. プラン不変＝前半3部説；福本和男」のほかに、当初プラン廃棄＝プラン交替説、プラン不変＝資本一般説、前半3部＝後半体系存続説、範疇的な意味での資本一般＝後続諸テーマ両極分解説、『資本論』＝「純化された資本一般」、プラン変更＝前半3部説、資本一般と後続諸テーマの「混淆」説、プラン変更＝資本一般説、宇野弘蔵氏の見解（「プラン問題」を正面から問題とした存在せず、変更の有無、『資本論』の対象領域の確定もない）、プラン変更＝前半3部＝後半3部廃棄説。

福本イズムの記憶がある昭和期には黙殺された問題提起が21世紀になると取り上げられるようになったのは福本が歴史的人物になったからなのか。「福本和夫」が「福本和男」と間違えられているのは残念ではある。それにしても中世スコラ学に匹敵するかのような煩瑣な議論には何とコメントしてよいかわからない。渡辺と小澤はシニカルに論評する。

福本の視点は、このかぎりでは（『資本論』の対象を「純経済過程」と断定したこと－岩田注）その後の凡百のプラン問題論者のそれとは、いちじるしく異なるものであったのである。プラン問題論者たちの、学校教師風の穿鑿性体質を改善するためには、今でも福本のこうしたラフな知的大胆さが中和剤として有効かもしれない。（渡辺、前掲『福本和夫の思想』100頁）

プラン問題の意義は、何よりも『資本論』の具体化を目指して現実分析の方法を模索した点に認められるのであって、この観点なしの「プラン問題」は無意味といってよいであろう。実際の論議の展開は、文献実証の面では多くの成果を残したとはい

え……本来の期待された成果はあまりに乏しかったということ  
を再度確認して稿を閉じたい。(小澤、前掲424頁)

福本が提起した「プラン問題」は初期三部作がめざした「理論  
から実践へ」の企図に沿ったものである。その意味において決して「不毛な議論」ではなかった。

『経済学批判の方法論』がドイツで紹介されたことはほとんど  
知られていない。

東京帝大法学部助教授の平野義太郎(1897-1980、1930  
年に治安維持法違反で検挙、1936年に転向、祖父は石川島造船所(現IH  
I)創業者)は1927年3月にフランスに向けて出発し1929  
年9月に帰国する。平野は野呂栄太郎(1900-1934、マルクス  
経済学者、非合法の日本共産党委員長を務める)らと『日本資本主義発達  
史講座』(岩波書店、1932-1933年、全7巻)を編集した「講座  
派」の論客として知られている。『日本資本主義発達史講座』の刊  
行時、すでに福本は獄中生活を送っており、講座派を批判するのは  
戦後になってからである。

1929年、フランクフルト社会研究所に滞在中であった平野  
は『社会主義・労働運動史雑誌』第14巻(157-159頁)に書  
評を寄稿した。

福本のフランクフルト学派とのつながりを発掘した八木紀一郎  
は、書評の概要を次のようにまとめる(『福本和夫著作集 第2巻』月  
報、2010年、10-12頁)。

1920年代の日本ではマルクス経済学をめぐる議論が活発化  
している。マルクス経済学の全体系や『資本論』の方法論的な問  
題を正面から初めて論じた福本の著作は大きな反響を呼び起こし  
た。

『経済学批判の方法論』の方法論的立場には2つの大きな特徴  
がある。第1にマルクス弁証法を歴史的・社会的な現実性に限定  
したこと、第2に下向・上向法を議論の核に据えていることであ  
る。

第1の立場では、福本が解釈するマルクス弁証法は「純観念  
論的転倒」ではあるが、「意識の物象化」が経済学を中心問題で  
あるとした問題提起は「一步前進」であるとその意義を認める。

平野が焦点を当てたのは第2の立場である。平野は、福本が  
『資本論』冒頭の「単純商品」の歴史的発展過程と論理的展開を下  
向・上向論によって結びつける議論の正当性を評価した上で、下  
向は空虚な抽象化を上向は概念の実体化を生むだけで「具体化」  
の手続きが欠如していると指摘する。さらに、資本の内在的運動  
が貫徹するための具体的・実在的条件は『資本論』の範囲外であ

るとする福本の主張は妥当性を欠く、と論じた。

八木は、平野が肯定的に紹介しながらも最終的には否定的に評価するそのコントラストに注目する。福本の著作をネガティブに評価するのであれば、ドイツの学術誌でわざわざ書評を掲載するまでもない。しかも、平野が紹介したのは『経済学批判の方法論』のみである。

私の憶測では、この書評が執筆された時期の政治状況にかかわっている。福本の第1の立場に対する平野の留保がコミンテルン正統派のコルシュやルカーチに対する論難と同列であることは自明である。それでは再建日本共産党内での福本の失脚とそれを正当化した「1927年テーゼ」については、平野はその内容をいつ知ったのであろうか。それは在外研究の旅であったかもしれない。

(前掲12頁)

1927年の福本の失脚を知りながらも、日本を代表するマルクス主義の研究書としてドイツの専門誌に書評を掲載せざるをえなかったことは何を意味するのだろうか。1929年までの日本では福本思想のレベルは群を抜いていた。政治的には否定された福本ではあったが、理論的には無視できなかったのである。(政治的敗北を喫したコルシュやルカーチが思想的には高く評価されているのにもかかわらず、福本思想に関しては政治的評価＝思想的評価となっている。客観的に見て日本のマルクス学への福本の貢献度はきわめて高い。正当に再評価すべきであろう。)